

ナキリスゲの話

小山 鉄 夫

日本ではスゲ類は平地に於ては春開花して初夏には果実となるのが普通であるが、其の中に一部晩夏から花を抽し秋に果実を着ける一群がある。之がナキリスゲの仲間である。従つてアキカサスゲは丁度普通のスゲとナキリスゲ群との間に花を着ける事になるわけである。ナキリスゲと言つても細かく見れば、かなり種類は多く、其の大部分はアジアの熱帯乃至は亜熱帯に分布して居る。それ故、日本は丁度ナキリスゲ類分布北限に當つて居るが、この類決して少い方ではなく、新日本では本州以南に6種許ある。私はスゲの中でもとりわけこの類に興味を持つて居るので、茲に今迄に余り取上げられなかつた面を中心として、私なりにナキリスゲを御紹介申上度いと思ふのである。

ナキリスゲ類の概観——ナキリスゲ類は全部ナキリスゲ節と言ふ非常に均一的な節に編入せられて居る。この節が他のスゲ類とはつきり区別される特徴はアゼスゲの様に柱頭が2本で果実がレンズ形である事と小穂が全部（早に頂端の一箇を除いて）雌雑性といつて上部に雄花下部に雌花を着ける事に依るのであるが、更に普通のスゲに見られない性質として、ナキリスゲ節の多くのスゲが丁度日本のナキリスゲ・フサナキリスゲの様に円錐花序を成すと言う特徴がある。

斯様にかなり変つて居る上に秋に実が出来る等（熱帯では通用しないが）割合に目立ち易いので非常に多くの種類が記載せられたのはむしろ自然であろうけれども、その形の類似に依る分類の困難の為、同じものがずい分方々で別々に書かれたので、現在私達はその異名の整理に実はあたつて居る様な次第になつて居るのである。そして、その様な多くの名は大體次の様にして発表されて来たのであつた。

ナキリスゲ類研究の経過★——ナキリスゲは前述の様に歐洲には普通ではなく（実はバルカン半島に少数を産するに過ぎない）、又其の多くのものが今尚フローラの解析が不完全である様な熱帯アジアに生じて居るので、初めて二名法に依る名が与へられたのも他のスゲに比べればそう古くは無い。世界で最初に記載されたナキリスゲは実に本邦のコゴメスゲで Thunberg 氏により *Carex brunnea* Thunb. として彼の著 *Flora Japonica* 38 頁に紹介されたのが18世紀の終り 1784年の事である。その際の T 氏の基準標本の部分を過日大

井博士が比較研究の為、遠くスウェーデン国ウプサラ市から取寄せられ現在京大に保管されて居るが、之が私達ナキリスゲを研究する者の唯一の手がかりともなつて居る。

19世紀に入つて漸々現在知られて居るナキリスゲ節のスゲの大部分が記述された。この時代に報文に表はれた種類のうち、新種の報告で、多少共に日本に影響すると思はれるものを中心として列挙すると次の様である。

コゴメスゲに次いで1810年に R. Brown 氏はオーストラリアから *C. gracilis* を報告した。Boott 氏の図説第一部 154 図版がそれであるが、邦産ナキリスゲに極めて似た一種である。或はナキリスゲと同一種かも知れないが（序で乍ら面白い事に日本から濠洲迄とんで分布するものがスゲには決して少くない——コウボフシバ、アハボスゲ等。）、若しそうでも *C. gracilis* Curt. (1777) の所謂 later homonym になつて使へない。之に続くものとして、矢張り19世紀始めの発表として D. Don 氏の *C. lenta* (1825年——印度北部から、ナキリスゲに良く似た一種)；*C. longipes* (Nepal から1825年——本種は東大に私の同定したものが一枚有る。印支産)；Nees 氏の *C. longicuris* (矢張り Nepal から1834年) 等がある。今私は多数印度北部産のものを挙げたが、北村教授も植物分類地理上に再三述べて居られる様に、北印度のフローラは日本のそれに極めて近いので日本植物を評するには一応調べなければならぬのである。

19世紀中頃には Steudel 氏が出て、当時迄に知られた禾本・キャツリグサ科植物を *Synopsis Plantarum Glumacearum* 2巻にまとめたが、この後篇に當るキャツリグサ科の部に *C. mauritanica*, *C. asperifolia*, *C. ischnantha*, *C. assimilis* と言つた様なナキリスゲの新種を沢山書いた。このうち *C. ischnantha* は日本産で、若い植物を記述し居り、私はナキリスゲと見て居るが、原標本を見なくては決定的な事は言へない。Boott 氏の有名なスゲの図説 *Illustrations of the Genus Carex* (前出) の出たのはこの頃 (1858—67年) で、この中に図解されて居るナキリスゲは（全部第一部——図説は4部から成る）*C. gracilis* R. Brown (154—155図版)、*C. gracilis* β. *major* Boott (156 図

★研究史及び類縁については出版されたものは一つもない茲でこの問題につき稍詳しく述べたのもこの欠を補はんとする微意に外ならない事を諒とせられ度い。

版)、*C. teinogyna* Boott (158 図版——インドよりの新種)、*C. longicuris* Nees (157 図版) の各種である。これより20年降つて、1873年に支那植物の研究家の Hance 氏が支那からタガネサウと共に *C. Faberi* と言う邦産ナキリスゲ酷似の一種を記載した(*Journal of the Linnaean Society*, Vol. 13)。

カヤツリグサ科の専門家として知られて居る英国の *C. B. Clarke* 氏とフランスの *Franchet* 氏は19世紀半ば過ぎ(むしろ終り近くに) 時を同じうしてナキリスゲの新種を書いた。特に *Franchet* 氏は御存知の様に広く東亜のヌゲを研究した人で、それが *Les Carex de l'Asie orientale* としてまとめられたのであるが、ナキリスゲは *C. mosoynensis*, *C. Bodenieri*, *C. sendaica*, *C. gentilis* の5種で、いずれも前論文の出版前に *Bulletin de la Société philomathique de Paris* 7巻(1859年)に発表され、この内 *C. sendaica* は日本より記載され現在センダイスゲに、他は総て支那から書かれ現在日本に関係あるものとしては *C. gentilis* が台湾のナカハラヌゲにそれぞれ用いられて居る。尚、わき道へされるが、日本のヌゲを始めて大規模に分類学的に研究した人はこの *Franchet* 氏で、記載文と言ひ図解と言ひ当時としては実に満点と言へる仕事をした。その日本のヌゲのクリティックに使つたフォーリー師の標本の副品の殆んど全部が、又之京大に在つて、邦産ヌゲの研究に不可欠の基礎資料を提供して居る。又フランシエ氏はクラーク氏と交通して居り、為に *C. longistolon* (センダイスゲと同一)、*C. stipinux*, *C. Henryi* (いずれも支那より) の命名者は *C. B. Clarke* であるが、発表の手続は *Franchet* がして居る (*Bull. Soc. philom. Paris & Nouvelles Archives du Muséum, Paris*)。 *Franchet* の死後引続いて東亜のヌゲを書いた仏国の *Léveillé* 氏は一部 *Vaniot* 氏と共に1901年より10年にかけて *C. Franchetiana* *Lév. & Van.* (センダイスゲとナキリスゲとの混合物らしい)、*C. hongnoensis*, *C. Husnotiana* (私はセンダイスゲと同一物と考へて居る) を書いたがいずれも大したものではない。

1909年にカヤツリグサ科の大斗独逸国の *Kükenthal* 博士(今尙健在)の不朽のモノグラフが出た。K氏はこの中で今迄やたらに書かれて来た多くの異名をすっかり整理された。更に今迄極めてルーズに扱はれて居た節が茲で始めて統一されたのは非常に大きな仕事である。結局、茲で世界のナキリスゲは6種10変種になつたが、私に言はせるとナキリスゲに関しては少し所謂“ツブシ過ぎ”の形と思はれるが、K氏の当時の資料では之はむしろ当然の事で茲迄整理する等仲々出来る事ではない。この中で始めて知られたのが日本のフ

サナキリである。

日本の学者に依るナキリスゲ類記述の鎗矢は早田博士の發表で1911年に博士の著 *Materials for the Flora of Formosa* の中に *C. Nakaharai*, *C. bilateralis* を台湾から書かれ、之に中井博士の *C. Hattoriana* (小笠原)や本田博士の珍種 *ソングウスゲ* (*C. sacrosancta*) が続いた。秋山博士は1932年に *C. amamioshimensis* を発表された。之はコゴメヌゲとナキリスゲの区別を最初に注目せられたものとして重きをなすのである。

日本のヌゲに決定的な説明が与えられたのは矢張り1936年の大井博士の名著 *Cyperaceae Japonicae pars I^{ma}* (1936) である。先生は丁度 *Kükenthal* 博士のモノグラフの日本に於けるものとも言ふべきこのモノグラフ中で、先生一流の正確さで新たに書くべきものは書き、異名に下すべきは下し今迄の結果を旧日本で10種1変種とされた。1930年から36年にかけて先生の手についたナキリスゲの新種はナキリスゲ、オホナキリスゲ、キシウナキリスゲ、タカサゴフサナキリ(台湾)の3種1変種の外前出のフサナキリを種に引上げられた。私は之等に当時調査不十分であつた三河から2変種センダイスゲモドキ、シホカゼナキリを加へた。

Kükenthal 博士のモノグラフ後 *Kükenthal* 博士英国の *Nelmes* 博士、大井博士及び筆者がマレーシア、台湾等から少数種を追加して居るが、直接日本に関係が無いから省く事にしたい。

ナキリスゲ節とその類縁性の問題——ナキリスゲ節 *Sectio Graciles* *Tuckerman* はナキリスゲの概観の所で述べた様に扁平な2柱頭の果と円錐花に依り特徴づけられた極めて均一的な一群と言ふ事が出来る。この様な変つた特性にからんで種々と面白い問題が生じて来る。

Tuckerman 氏は1843年に濠洲産の *Carex gracilis* *R. Br.* を基準種とする *Graciles* を彼の著 *Enumeratio Methodica Caricum quarundam* 10頁に分類群の位置の指定無しに発表した。彼はヌゲ属を *Psyllophorae* (原始ヌゲ類の事)、*Vigneae* (今日のマスカサ亜属の大部分)、*Vigneastrae*, *Leptantherae* (マスカサ亜属及び真正ヌゲ亜属のそれぞれ一部)、*Legitimae* (真正ヌゲ亜属の大部分) の5群(分類上は節と表示す)に分けたが、*Graciles* を含む *Vigneastrae* に就て彼はこう記載して居る。“花穂は複生分岐し(筆者言ふ——円錐花を成す事)、雄雌性にして先端に雄花を生じ、柱頭は2又は3岐す。この記述と彼が *Indicae* (ハナビスゲ等)、*Polystachyae* (アハツブスゲ等) をこの *Vigneastrae* に入れて居る点とを考へ併せると、この *Vigneastrae* とは今日の所謂 *Indocarex* の事であつて、

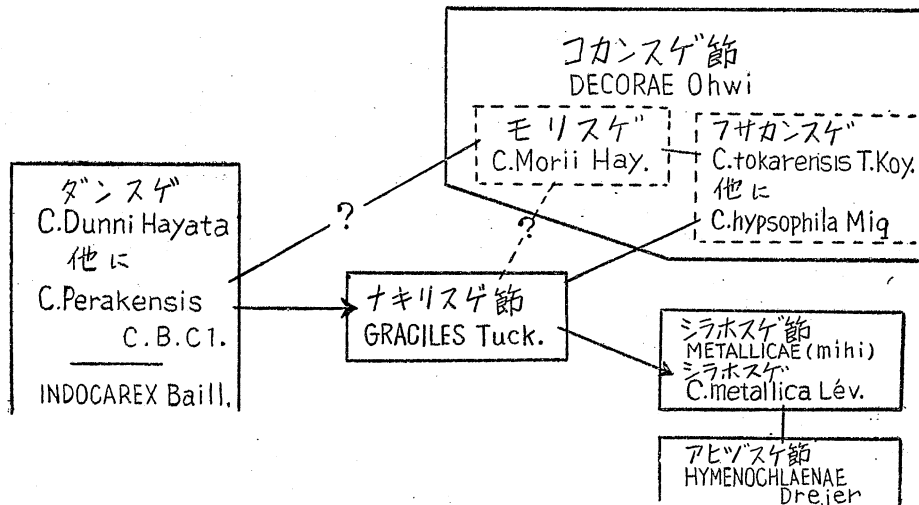
つまり彼はナキリスゲを *Indocarex* に近いものとして居るのである。之は日本のスゲのみを見て居る方には大変妙な分類に考へられるかは知らぬが、後で述べる様に私には大変面白い思ひつきと思はれるのである。

Kükenthal以前は小穂上の性の分布が、柱頭や小穂の数と共に比較的見附かり易い特性の一つであつたため、現在に比べれば遙かに重要視せられて居たので、ナキリスゲ類は柱頭2本である事と相俟つて大抵マスキサ亜属に相当する様なグループに入れられて居た★。好例として一・二示すと、Franchetは1898年の *Les Carex de l'Asie Orientale* で *Pleistachyae androgynae* と言ふ丁度今日のマスキサ亜属に相当する群に含めて居るし、C. B. Clarkeも彼の死後1908年に出版の *New genera and species of Cyperaceae* 中で *Vigneandra e. Roseae* と言ふ今日のマスキサ亜属中の雌雌性小穂を持つた一群に入れて居る。

Kükenthal博士は1909年の *Planzenreich IV: 20* に採用した *cladophyllum* (即ち前葉) に重点を置いた分類系で、*Graciles* を *Hymenochlaenae* 即ちアヒズスゲ・ヤマダスゲ・タカネシバスゲ等を含む大きな節の一亜節として完全に真正スゲ類に含めて了つた。大

井先生の分類系でもこの附近は排列順に関する限りK氏のものと大同小異である。

私がナキリスゲ節の位置に就いて賛成し度いのは Nelmes 博士の *The genus Carex in Malaysia (1951)* 中の分類系である。彼は *Graciles* を *Indocarex* の次に来べき *Eucarex* (真正スゲ類——新しい規約では *Carex* [Coss. et Germ.] を用いるのが良い) の一節として居る。それ故この分類系ではナキリスゲはハナビスゲ等の円錐花を具へた *Indocarex* と一箇の苞腋から数箇の小穂を束状に出す *Decorae* と言ふ節との間に来る。*Decorae* は之れ又日本では理解し難いグループで邦産の典型的なものは私の命名した一種フサカンスゲが見られるに過ぎぬが、ナキリスゲの果胞を三稜形にして、小穂をシラホスゲ式に並べたものと思つて下されば大体良い。私はスゲでは円錐花は総状花より原始的で円錐花が退化する時先づ枝の節間がつまつて小穂が束状となり、次に一小穂になると考へて居る。だから、イネ科の円錐に於ける仮輪の成因と同様に考へて下されば宜敷い事になる。それ故ネルムス氏の分類系は私の意見と良く符合する事になる。又、私はナキリスゲの類縁を次の様に考度いのである。(図)



それ故前に述べた Tuckerman 氏の見方はかなり支持される結果となつたのである。

邦産ナキリスゲ節の種類 — ナキリスゲの種類の記事については種々参考書が出て居るから(後節文献参照)茲では一々の記載と言ふ様なものには言及しないで、新日本に知られる6種の極く簡単な紹介にとどめておき度い。

○日本産ナキリスゲ類への人為検索表。

1) 柱頭は伸長し、果胞より明らかに長く、果実が成

熟しても良く残存する。雌花の鱗片は褐色を帯び、長楕円状披針形で果胞と同長又は僅に長い、……

6. フサナキリスゲ

1) 柱頭は果胞より明らかに短く、果実が熟すると通常脱落する。雌花の鱗片は淡色の事多く、果胞より短かく、時に殆んど同長。

2) 頂小穂は雄性、側小穂は雌雌性。……

…… 3. オホナキリスゲ

2) 頂小穂は雌雌性、側小穂も通常雌雌性、極めて

★古典的なスゲの類別に就いては兵庫県博物学会誌創刊号の大井博士の記事を御覧戴き度い。

稀に雌性。

3) 小穂は密花、果胞は辺縁及び両面に剛毛を有し、多くは広倒卵形(コゴメスゲでは広楕円形)。

4) 小穂は狭円柱形、径2-3耗;果胞は楕円形乃至広楕円形、長さ2.5-2.7耗;葉は黄緑色又は鮮緑色;海岸附近に見る。

5) 小穂は少くとも一部一節より2-3箇を生じ更に分岐する事がある;全体大形、葉は黄緑色。……………2. コゴメスゲ

5) 小穂は単生、分岐せず、全体小形、葉は狭く黄色を帯びず、根茎稍太く横臥する。……………2-b. シホカゼナキリ

4) 小穂は円柱形乃至長楕円状円柱形、径3.5-4耗;果胞は広倒卵形、長さ3-3.5耗;葉は極めて硬く、暗緑色。

5) 根茎は短くして匍枝無し。……………1-c. ナキリスゲ

5) 根茎は長き匍枝を生ず。
6) 小穂は3-4箇、総て単生、側小穂は偶に雌性。1. センダイスゲ

6) 小穂は5-8箇、少くとも下者は隔離し、往々一部双生、側小穂は総て雌雌性。……………1-b. センダイスゲモドキ

3) 小穂は疎花或は稍疎花;果胞は剛毛少く、通常側面は脈上の一部を除き無毛;広倒卵形或は楕円形。

4) 大形の植物、高さ1米に達す;果胞は広倒卵形を帯び大形、幅約1.5耗。……………4. キシウナキリスゲ

4) 小形の植物、高さ40釐に達す;果胞は楕円形で幅1耗以下。……………5. ジングウスゲ

1. センダイスゲ — *Carex sendaica* Franchet var. *sendaica*.

ナキリスゲ類中独特な小形の種類。長い地下匍枝は特異なものである。乾いた疎林下のむしろ岩の多い様な所に生えるが、海岸にも稀に見る。稀品に属する。フランシエは仙合附近産のフォーリー師の採集品から記載したが、原記載について居る仏文の短いノートを讀むと同氏は初めサドスゲに近いものと考へて居た事がわかる。其後日本人で東北で採つた人は無く、本州中部以西、四国、九州に点々とある。済州島に分布する。近畿では奈良春日山、大津、比良岳、紀伊白浜に産する。

〔図解〕 フランシエ「東亜のスゲ」(前出)にある。センダイスゲでも小さい方を描いたものである。

1-b, センダイスゲモドキ — Var. *pseudo-sendaica*

T. Koyama

名古屋の植物研究家井波一雄氏の^{オナゲ}三河猿投山の採集品から私が書いた。センダイスゲとナキリスゲの中間の様なものと言へば、遠からずと言つた所である。本州三河(上記)及び済州島に知られる。

〔図解〕 植物研究雑誌29巻46頁、第2図:G-H。

1-c. ナキリスゲ—Var. *Nakiri* T. Koyama

最も普通の一品で特筆すべき事はない。日本(本州以南)から朝鮮に分布する。

〔図解〕 牧野図鑑2381図。

本品の根茎が少しく伸長して(匍枝を曳く事とは根本的に異なる)横臥し、小穂は疎花で乾いて赤錆色となる事多く、大部分単生するものを、

コナキリスゲ—*forma simplex* T. Koyama

と言ひ、ナキリスゲと共に分布し、それより稍少い。近畿では那智山、屋写山等。

2. コゴメスゲ—*Carex brunnea* Thunberg var. *brunnea*.

上総・安房・相模・駿河及び近畿以西、四国、九州から琉球・台湾・比の海岸及駿近くに生じて居るナキリスゲ類似の一種で、キナリスゲより遙かに量的に乏しい。

元来 *Carex brunnea* Thunberg と言ふ名はナキリスゲにあてられて居たのであるが、前記の様に大井先生がウブサラからT氏の原標本の一部を取寄せられてT氏の *C. brunnea* がコゴメスゲなる事がわかつた。それ故 *C. brunnea* をナキリスゲの学名とするのは間違ひである。この間違ひは Franchet, Kükenthal 等大多数の学者がして居た、というより上記の歐洲の学者はコゴメスゲとナキリスゲとを混同して *C. brunnea* として居たのであつた。従つて松村任三博士始め秋山博士以前の日本の学者も同じ意味で使つて居たが、秋山博士は 1932 年に両者を区別すべき事を発見されて *C. amami-oshimensis* を書かれたわけであつた。しかし前記のウブサラよりの標本で *C. brunnea* がコゴメスゲとなつた為両者の学名は私が茲に使つた様になつたのであるが、念の為必要なものに限つて整理して置こう。

ナキリスゲ: *Carex sendaica* var. *Nakiri* (Ohwi) T. Koyama 異名 *C. brunnea* of many authors, at least partially, not Thunberg; *C. brunnea* var. *Nakiri* Ohwi, new name given to Japanese plants which had been misidentified as *C. brunnea* Thb.

コゴメスゲ: *Carex brunnea* Thunberg

異名 *C. amami-oshimensis* Akiyama

〔図解〕 植物研究雑誌29巻、46頁、第2図.A-B。

2-b. シホカゼナキリ—Var. *abscondita* T. Ko-

yama 井波氏が知多半島の海岸で採られた一品で検索表の様な差があるほか、稈が低くて葉にかくれて居るという特長がある。

〔図解〕 植物研究雑誌29巻、46頁、第2図C。

3. オホナキリスゲ—*Carex autumnalis* Ohwi

オホナキリとは言つても、ナキリスゲより大形ではない、むしろ細い感じがある。検索表に記した様に頂小穂が雌性なのと、雌花部が疎花であるから一見判然としたスゲである。

本邦の特産で珍らしく、近畿地方を主産地とする。即ち近畿では播磨生駒山、紀伊大合ヶ原山に知られ、備後・阿波・沖繩に分布する。図は未だ出て居ない。

4. キシウナキリスゲ—*Carex nachiaea* Ohwi

前種と共に日本特産のナキリスゲで、邦内で最も大形である。最近迄那智山と化九州の2ヶ所に過ぎないと考へられて居たが、一昨年秋大井先生が鹿児島城山で、筆者は山本虎夫・三浦龍作両氏と共に紀伊白浜、田辺にそれぞれ見出した外、最近筆者は東大腊葉庫整理中にナキリスゲの中に混じて居た穂岐産の一枚を見出した。今後も恐らく四国南部等から発見される公算が大きい。之も図は無い。

5. ジングウスゲ—*Carex sacrosancta* Honda

伊勢神宮で見附かつてこの和名がついた。之も本邦の特産。ナキリスゲよりも遙かに繊細で、果は疎に着く。近畿地方に最も多く知られるが、個体の量は左程多くはない。産地を挙げると次の様になる。伊勢(内宮・外宮)、大和(奈良:春日山)、三宅島、三河、土佐、九州。

〔図解〕 北大理学部紀要V、1巻、第7図版。

6. フサナキリスゲ—*Carex scabriculumis* Ohwi

検索表に表はれた様な特長により、日本では最もはつきりした種類であろう。実を言ふとこの形のナキリ

スゲが熱帯の形で、台湾やマレー群島のものは殆んどフサナキリの仲間である。海岸や河原等荒れた砂地に生じ、日本の近畿以西、済州島、琉球へ分布する。近畿では丹波妙高山、丹波奥山、播磨富栖、和泉犬鳴山、紀伊稲積島、同寄絶峽、同三川村等に知られる。図は未だない。

ナキリスゲ類の参考文献——まとまつたものは無く、スゲの解説の一部として次の様なものがある。向このリストは日本に直接関係のあるものに限定した。私が研究史の所で触れたものを全部列挙しても普通の場合意味が無いであろうと思つたからである。

秋山 茂男 : 北海道大学理学部紀要V輯1巻 : 57頁 第7図版 (1931)

———— : 同上V輯2巻182—186頁 (1932)

Franchet : Bull. Soc. philom. Paris, 8^e sér. tomé VII : p. 42 (1895)

———— : Nouv. Archiv. du Muséum, 3^e sér. tomé VIII : pp. 247-3 (1896)

———— : l. c., tomé IX : p. 137, avec pl. 10, f. 2. (1897).

Kükenthal : Englers das Pflanzenreich, IV-20 : pp. 599-603. (1909).

大井次三郎 : 植物分類地理2巻 : 27頁及び103頁 (1933)

———— : 京都大学理学部紀要B輯5巻 : 251頁 (1930)

———— : 同上B輯11巻 : 464—471頁 (1936)

———— : 日本植物誌 : 210—211頁 (1953)

小山 鉄夫 : 植物研究雑誌、29巻 : 45—48頁 (1954)

以上

(東京大学理学部植物学教室)